

統一テーマ「ロマンス諸語における言語接触」

富盛伸夫（とりまとめ）

§ 1 はじめに

日本ロマンス語学会第46回大会の統一テーマは「ロマンス諸語における言語接触」であった。この枠内で寺尾、田中、富盛、山本、直野の5名が発表（持ち時間、各20分）を行なった。休憩を挟んで、総合討議が菅田茂昭氏の司会のもとで行なわれた。田中、富盛、山本の各氏は発表を論文としてまとめて本号に掲載しているが、寺尾、直野の各氏からの論文投稿はなかったため、本号では「統一テーマ発表の概要」としてそれぞれ2ページにまとめたものを掲載した。以下に総合討議での質疑応答の抄録を紹介する。

§ 2 総合討議と質疑応答

菅田茂昭（以下敬称略）：今日は言語接触をテーマに、充実したお話を伺うことができ、良いテーマが選ばれたと思う。言語接触といえば、その結果起こる言語干渉が問題となるが、私が学生の頃は、この分野では Haugen の名前が挙げられ、アメリカ大陸でのノルウェー出身者と英語との関係が、次に富盛先生からも今日言及があった、リトアニア出身の Weinreich によるスイスなどにおける分析が知られていた。現在私の手元には、1981年にメキシコで出版され、1998年に Gredos から出た Sala の *Lenguas en contacto* があるが、この分野の研究を集大成したものである。最新のニュースとしては Holm 編の *Contact languages: Critical Concepts in Language Studies*（5巻、約2000頁）が刊行予定である。Weinreich の *Languages in contact*（1974、神島武彦訳『言語間の接触』岩波書店、1976）には Martinet の序文があり、紹介すると、「言語の接触があると互いに模倣が起こり、そこで言語の合流、つまりコンバージェンスが起こる。逆に接触が減少すると、分離して分岐、すなわちディバージェンスが起こるのだ」と書いていた。この通り今日通用するかどうかかわからないが、ロマンス語全体の成立を考えてみても、かなりの部分が内部的な変化ではあるが、接触の問題として説明出来るものもあると思われる。

さて、このテーマは非常に幅広く、基層言語から始まって、上層や傍層という問題まで話が及ぶし、さらにはバイリンガリズムとの関係もある。また今日はクレオールの問題は扱われなかったが、私もこのテーマが選ばれたときは、こんなに実り多い結果になるとは思っていなかった。

それでは、総合討議に入ることにする。もし時間が余れば言語干渉、それから借用、干渉といっ

たタイプの問題での議論に入ることも可能かと思う。

長中慎吾：(田中慎吾に対し) 今日の発表では Jaberg のイタリア全土の言語地図の資料は参考にしなかったのか？

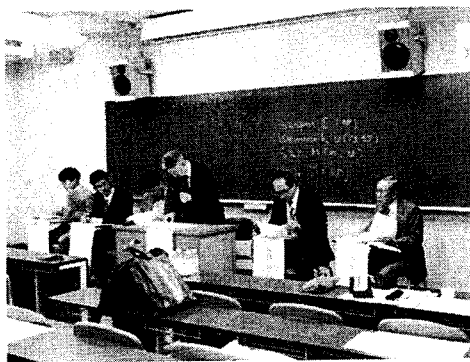
田中慎吾：今回は参考にしなかった。

長中：問題になっていることに関して、(そこには) 参考になる例があるかもしれないと思う。

また、発表のなかの、南イタリアに残っているギリシャ語圏との接触について、どのような影響があったのかということをも補足して頂きたい。

田中：ギリシャ語からの影響と考えられている現象

は、具体的にどの変化がどうというよりは、不定詞が消失しているという現在の状況がギリシャ語と並行的にみえるということだ。それを影響と考えている。ドイツ系の研究者は、いわゆるマグナ・グラエキアの時代のギリシャ語から影響を受けたと主張しているが、それは、まずギリシャ語が話されていたところにラテン語が上から被さってきて、そのギリシャ語の語法が残っているという考え方で、それによって次第にいわゆる不定法、つまり不定詞が退化してきたという。しかし、必ずしもそうと全員が考えているというわけではなく、少なくともビザンチンのギリシャ語を考慮して、現在の状況からみて影響があったと判断するということである。



古浦敏生：(田中に対して) 先ほどの長中先生の質問と関連してお聞きしたいのだが、古代ギリシャ語では不定詞があったのに、現代ギリシャ語では不定詞が消失しているのは、古代ギリシャ語の $\nu\alpha$ という「～するために」という接続詞が $\nu\alpha$ になって、その $\nu\alpha$ の後ろに接続法がつくようになり、結果的に不定詞が消失した、ということになっている。そうすると、ギリシャ語の離れ島である地域では、もとは不定詞が消失した状況だったのが、イタリア語の不定詞の影響で不定詞を使うようになったというふうに考えるのは明らかかなことなのだろうか。

田中：イタリア語の影響でということか？

古浦：はい、イタリア語の影響で不定詞も使うようになった。つまり、流れから言えば、不定詞を使わない状況から徐々に不定詞を使う状況へと移行する過程に今あるのではないかと考えられないだろうか。

田中：それは考えられるが...

古浦：まだ結論が出ていないことなので難しいのかもしれない。

菅田：直野先生、発表の最後にスラブ語からの問題提起を頂いたが、このあたりのことについてはいかがか。

直野敦：少なくとも今の不定詞、接続法の問題というのは、スラブ語というより、実はルーマニア語では非常に重要な問題である。ルーマニア語では日常会話ではほとんど不定法を使わない。先ほど出ていた「できる」という例は、ルーマニア語では、「私が」というときは pot になる訳だが、その後に来るのも、日常会話では接続法を使う。しかし不定法を全く使わないかというのと、並行して使っていて、話し方が文化的な方向にいくと、つまり演説や学校の授業などになってくると、だんだん不定法を使うほうが多くなっていくということがある。ところが、同じように接続法を使うバルカンの言語は、現代ギリシャ語とブルガリア語、アルバニア語であるが、アルバニア語の場合は、方言が大きく2つ分かれていて、コンボの方言と、南のトスク方言があって違うのだが、私が主にやっている南部方言では不定法はもう完全になくなるから、辞書に不定法は出てこない。現代ギリシャ語の辞書でも、ブルガリア語の辞書でも、アルバニア語の辞書でも、1人称単数、直説法1人称単数しか形が出てこない。ところが、やはり不定法的なものが必要になってくるらしくて、それを補うために、他の言語で言うと、過去分詞的な形が不定法の代わりに使われたり、それからルーマニア語だと、スピンという、動名詞と言っていいのか知らないが、それがいわゆる名詞、動詞からできた名詞として使われるようになってたりして補う形になっている。アルバニア語でも、北部の方言では、第二次的不定法というふうに言われているらしいのだが、そういうものが新たに使われていくということがあるみたいである。

寺崎英樹：(直野に対して)ルーマニア語で格が残っているというのは、ラテン語から継承されたのか、それともそうではなくて再形成されたのかというのが、ルーマニア語のひとつの問題になっているように思うのだが、先生はスラブ語の影響ということを示唆されているが、その点についてお聞きしたい。

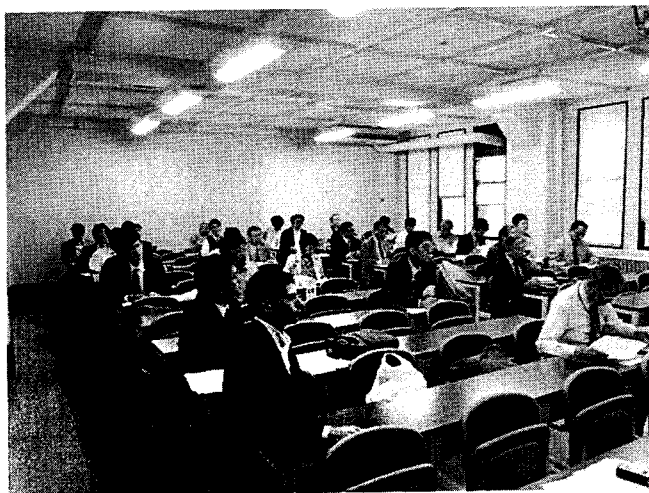
直野：個人的にはわからない。ルーマニア語の研究者(の意見)は、この点に関して、2つあるいは3つくらいに分かれていて、スラブ語の影響があったからルーマニア語には属格と与格の形が残ったのだ、と言う人もいるし、いや、それはラテン語にもともと与格があったのだから、それがずっと残っているだけのことだと言う人もいる。それから、私の先生の Rosetti さんは、格の問題をさらに中性名詞の存続の問題と結びつけている。中性名詞の存続も、人によっては、これはスラブ語による影響でルーマニア語は中性名詞がずっと残った、という説があるが、Rosetti さんはむしろその本来のラテン語の中にあつた中性名詞が、そのまま残っていて、さらに、人格名詞といいますが、ルーマニア語では、人間を表す言葉が、他動詞の目的語に、直接目的語になったときに必ず pe という前置詞をとらなきゃいけない。それを、名詞の中で特別にその人格名詞というか、人間名詞というか、そういうものが出てきたので、スラブ語の影響もあつただろうけども、それもルーマニア語の中で、つくられていったのだと言っている。だからはっきり言ってそれはちょっとわからない。

今田良信：(富盛伸夫に対して) ご発表を興味深く伺った。

レジュメの中で、どのような干渉があり得たのか仮説以上の主張はできない、という箇所があって、その前に、言語使用者の意識として、ゲルマン語の上層というものでそういうことが起こったというふうには考えたくないという趣旨の主張もあると紹介されている。意識としては、そういうこともあるかと思うが、実証的な、もちろん仮説のレベルでも構わないが、どういう可能性があり得るのか、あるいは、干渉でなければ、どうしてその動詞第2位置というものをとり得るようになったのかということについてもう少し補足して伺いたい。

富盛伸夫：スイスのロマンシュ語

の初期の文献は中世末期から散見される。民衆の発言からの引用というかたちでは、12世紀13世紀の裁判記録で既にあるが、それは前後の文はラテン語で書かれていても、引用されている部分はその村人の証言として引用されている。そのときにはもう既に、非人称の主語という現象、いわゆる形式主語、ダミーの主語がもう認められ



るのが興味深い。そして、主語の次には活用動詞があつて、その後に論理上の主題とみなされる名詞句が配置されているとみられる。そこで重要なことは、必ずしも文法上の一致現象は起こらない。これは最後に例を出した現代語でもほとんど同じであるが、既に中世語からその構文上の傾向がある。徐々にゲルマン語の定動詞第2位置が発達してきて、次第に干渉の結果としてロマンシュ語にもそれが及んだのだという仮説にこだわるならば、ゲルマン語自体の定動詞第2位置の発達史を突き合わせてみないといけない。しかし基本的にはゲルマン語研究の先行研究によると、最後に定動詞、活用動詞があつて、それがトピック化要請から、前方に名詞句が出されると、動詞複合体は文の中央に置かれるようになる。それには文アクセントの問題や、色々ある接辞の問題も出てくるので複雑な要因が絡んでいる。いずれにしてもゲルマン語については定動詞第2位置という統語的傾向はそれほど非常に古いものではないのだ、むしろ徐々に数百年の間に発達したのだ、という立場となる。英語についても、類似の仮説が松本克巳氏などから出されていて、中世末期から近代に向けて、西ヨーロッパ言語地域の Sprachbund のようにして発達してきた現象のように思われるというふうに主張される。このようにみると、ゲルマン諸語のうちでも、とりわけロマンシュ語に隣接

している地域の地域語の歴史とつきあわせねばならないとは思ふ。その議論の上でスイスのロマンシュ語の統語構造の歴史を見ると、先に述べたようにドイツ語の方で発達しつつあった現象が、もうかなり古い時代から進んでいた可能性があることも注目すべきである、と言える。実証的研究は必ずしも追いついていないが、その統語構造の問題はロマンシュ語の歴史の中で一貫してであると推測される。ゲルマン民族とロマンシュ語話者が接触した時代を考えると、おそらくは地域により大きく異なるが、5、6世紀以来強い接触があったわけであるから、その時代の文献は極端に少ないにしても、ロマンシュ語のある特質的な類型というものはそれより以前からあって、他方、平行した現象としてゲルマン諸語で verb second が発達した。時代は下るが、例えば英語の助動詞の do の発生というのは中世末期から近代の現象で、これも verb second と深く関係しているわけだが、必ずしも中世初期から verb second への力が英語の前身に非常に強い傾向としてはたらしき始めていたようには思えないのではないか。一方的なドイツ語からの干渉あるいは傍層的な影響というふうに片付けてしまうのは、つぶさに見ると、もう少しきめ細かに調べなければならない、ということではないだろうか、と考える。

鈴木信五：(富盛に対して) 2つ伺いたい。1つ目は質問というよりも思いついたことをまず述べさせて頂きたい。ハンドアウト 4 ページの 27 番の文なのだが、太字で書いてある一番最初は être 動詞にあたる助動詞であるか？

富盛：そのとおりだ。

鈴木(信)：やはり論理上の主語は tarabla か？ そして、fini がこれと一致していないということか。

富盛：過去分詞 fini が男性形単数で、女性形になっておらず文法上一致していない。

鈴木(信)：興味深いのは、その最後にある主語らしいものが、テーマであってしかも後ろにあるとおっしゃったと思う。ただこの形式自体はフランス語でも、例えば il est venu une femme. のように女性主語であっても il est venu とか、あるいはフィレンツェ方言にもやはり同じように -o で終わる男性形が使われてから una donna が後ろに出てくる主語であるという構造がある。これらの主語は、ただ、テーマということにはおそらくできないと思う。ただひとつ言えるのは、構造としては別に孤立したものではない。だからこれがゲルマン語との接触をどうこうという結論には至らないと思うが、主語が後ろに出てきて一致しないという形自体は他にもあるので、1つ思いついたこととして言っておきたいと思う。

それからもう1つ。なんと読むのかわからないが、前に下線が引いてある uossa について。

富盛：「今」という意味で、副詞である。

鈴木(信)：これは、もし無かったとしたらやはりダミーの主語が必要なかどうか。

また、もう1つ質問があり、別のことなのだが、2 ページの 11 番から 14 番の例文について、特に 14 番は、これはいわゆる proposition、つまり文というか節から外れて前に飛び出してきている

と考えれば、V3 とは言わなくてもいいと思う。11 番もその延長線でいくとそれが言えないか。そしてそのさらに上の、3.3 の B のも、2 つ並んでいる例文について、上はカンマが無く、下はカンマがある。前に出ていたら、eu「私」は clitic ではなく独立した主語だと思う。つまり 1 つの要素として考えていいと思うが、するとこの場合も前の要素が文の外に飛び出していると考えられないのか。

富盛：まず第 1 の例文 26 と例文 27 の文について。例文 27 は、uossa が副詞で、前に置かれている。次に動詞句が続き、最後に la tarabla となる。この ais fini... は過去時制になっている。あるいはこれは完了した状態と言ってもいいのかもしれない。いずれにしても fini は文法解釈上、形容詞にしろ過去分詞にしろ、一致（女性単数形）を期待したいところである。問題はこの構造で、ご指摘になっているように、この la tarabla「物語、話」という名詞句が文法的・統語的には主語ではない。しかし、論理的には subject 的な位置づけにあるというわけだ。そこで自問自答すると、ここは民話テキスト上の特異点で、民話の終わりを告げる定型であるので、その民話の語り手がここで意識してこの文を作っているのではない、と思える。談話レベルでは、「この話は終わったんだ、これで話はおしまいなんだ」、と言うことに焦点が当たっているわけだ。例文 24 から例文 25、例文 26 に挙げた例は全て共通の定型のもので、強調されているのは、例文 24 であれば、問題の主人公が絞首台に連れて行かれるという話の流れがあって、そこで下される判決そのものについてはもう当然出るものということが前提になっているので、これは取り立てて新情報ではない。そうすると、判決が出されたということ自体が重要で、それから数週間たって、ということで、プロセスの主な動作主は隠れて、統語上は受動形になっている。つまり、この例文中、太字で動詞の部分が見えられているところは、むしろこうフォーカスのように強く発話されている。従って、何が終わったのか、何が完了したのかという、コミュニケーション上補完的な情報として「判決」があるわけで、これは統語構造に支配されないレベルの、むしろ情報伝達の構造であろうかと思う。

さて、動詞形に a がついているのに注目したい。これは形式主語と考えられる。動詞と倒置して、動詞の接辞的に添加されている。統語構造では NP₀（ダミーという意味で 0 と書いておいた）となる。そこで、この形式主語（ダミーの主語）があるのと無いのとではやはり大きく説明が違うのではないか、というのが例文を別にした理由である。これは、まず X 要素があって、V が定動詞の動詞句、a が形式主語とすれば、XVS という解釈で一向に構わない。けれども例文 27 のところはそれ自体 a に相当する中性代名詞が無いから、これは特別な構造であるということで別になっている。この辺が悩ましいところで統語構造の観点からだけでは説明しにくい、ということになる。

鈴木（信）：例文 25 番も 27 番も、一番最初に 1 つ要素があるが。

富盛：そのとおりだ。

鈴木(信): もし無かったとしたら、25番のaとは別形のダミー主語が動詞の前にくるということか?

富盛: 仮定の話だが、これが通常の語順であれば、uossa が後ろに置かれてもいいわけだ。だから例文 27 で la tarabla が前(第1位置)にあれば、ais finida と女性形になるはずだ。ところが uossa が強調されて前に出ると ais fini となって、そこに情報の重心が移り、情報の補完的機能で、「この話は」が最後に付く。ここでは副詞的要素だが、それが前に出ることによってそういう情報上の重心の移動的現象が起きた、ということになる。繰り返すが、uossa が後ろに置かれれば通常の語順で、一致も起きる。

それから最後のご指摘、2ページの例文11と例文14について説明したい。例文14は、節ではなく、zieva は「～の後で」という前置詞として捉える。彼の複数の犬に食べ物を与えた、与え終えた後で、という文脈である。従って、これは文の構成要素で、外に出すというわけにはいかない。ただ、上の Arquint の例文中にみた、言語委員会推薦の新しいロマンシュ語はこうすべきだという提案文であるが、このようにカンマがあるのは、心理上、ポーズがあるように思えるが、イントネーションにも関係するのかもしれない。Arquint は、ポーズを置いても置かなくても不自然であると、いう。何か文としてのまとまりが無い、という印象があつて、全くこれは受け入れがたい、と批判しているということだ。従って、文構成上のまとまりが、倒置させることによって保たれているということで、やはり左方移動で外に取り出すというのが、非常にしにくい、という話者直感のようである。最後に、16世紀の Jachem Bifrun による聖書訳の序文の引用をしたが、その中で、左方移動するための工夫というのが、この短い文章に2箇所出てくる。そこでは接続詞 cha でつなげている。「それに対して」、というのを文頭に置いたら、cha という接続詞を置いて、その文を節の中に入れてしまう。そういう分裂文的にフォーカス化した構造をとることによって、文としての構成を保っているという実例を紹介した。(なお、このロマンシュ語では、いわゆる強調構文のような分裂文が多用される。)

牧野真也:(寺尾智史に対して) ミランダ語における、l の口蓋化から生じた lh と、e と o の二重母音化について、この2つの変化は区別する必要があると思う。というのは、ミランダ語の語頭の l が lh に変化する前の状態では、おそらく語中では l と lh が対立していて、語頭には l しか現れないというのが通常な状態かと思われる。そして、語頭で l がその後 lh に変わったのは、それは音声的变化というよりむしろ音素として lh に変わったのではないか。そうするともとの l の位置は可能ではあるが体系内の空き間として残る。そこに外来語で l を持っているものが入ってきたから、ちょうどそれを埋めるかたちになったのではないか。他方、語頭の e や o が二重母音になった理由は、むしろ、音韻的变化というよりも音声的な変化で、例えば e とか o が語頭に来ると自動的に ei, ou に変わるという約束がミランダ語にあり、そのため e と o を含む形が全部変わってきたのではないか。つまりミランダ語の場合は e と o が語頭に来ると何らかの理由で二重母音化するという規則があり、

外来語を取り込むときもそのように変化するのではないか。音韻的なレベルと音声的なレベルを区別したほうがよいかもしれない。

寺尾智史：非常に重要なお指摘だと思う。これは、ミランダ語の地理的な分布をどう捉えるかによっても話が変わってくると思う。Lh-の音韻性、すなわち音声ではなくて音韻と考える場合に1つ問題が生じる。ミランダ語には辺境変種、中央変種、そしてシェンディン変種の3変種がある。辺境変種はまさにこの語彙集がベースを置いた集落であるインファインス Infainç のことばである。中央変種においては、最初に言語記述がなされた集落であるドウエシュ・エイグレジャシュ Dues Eigreijas の場合もそうであるが、Lh-のような口蓋前部の流音に関して、音韻とみなす考え方は総じてよいと思う。ただし、シェンディン Sendin では硬口蓋を調点とする流音は語頭では現れない。これはミランダ語の正書法を記述した人たちのあいだでも、識字者でない年長者の70歳、80歳の農民においてもしきりと議論されるテーマである。音韻としてLh-が無いシェンディンはミランダ語の範疇に入らないという意見がある一方で、Lh- は単なる音声現象であり、ミランダ語正書法でももうLh- はやめて全部L-で書こうという、議論の揺れすらある。Lh- を音韻現象、二重母音を音声現象としてきっちり線引きができれば、おそらく牧野先生の説明も意味が出てくる。しかし、そこまで厳密にその硬口蓋の音声現象が(ミランダ語話者のすべてで)実現するわけではないというところに悩ましいところがある。もちろん、シェンディンではそのLh-の消失が速く、全部の言葉が置き換わったために前述のようになったという捉え方もあるとは思う。この分野のことは現地の研究者と、私のような外来の研究者が交流した上で話をつめていく必要があると思う。

佐野直子：(富盛に対して)非常に初歩的な質問で恐縮だが、スイス・ロマンシュ語について、結局ゲルマン語との接触が無ければそもそもロマンシュ語が形成されなかったという一方で、アルタディージュ(Alta Adige)のラディン語がある。あの言語とスイスのロマンシュ語がよく同言語であるという語られ方をすると、その2種の言語は文化的歴史的接触として共通性があるのか。それとも両方ともそのゲルマン語との接触があるという特徴によってこの2つがよく同じ言葉として語られているのか。もしご存知だったらラディン語もやはりそのゲルマン語的なその接触の痕跡みたいなものがあるのか教えて頂きたい。

富盛：これはイタリア語との接触もあるので山本真司先生のほうが回答者にふさわしいだろう。かつて北はNoricumと言われた地域に相当するが、ゲルマン語化した後、第一次世界大戦の頃まではオーストリア帝国の内部であった。例えばボルツァーノ Bolzano などの地名も現在でも2言語併用の表記をしており、今の子供達もまた街ではドイツ語でしゃべっている。それで、Bolzanoは北の方であるが、Trentinoのあたりまで今もなお部分的にドイツ語圏と言って構わないだろう。ラディン語はかなり山間部に残る形で存続しているが、現実の生活としては2言語併用ないしは多言語併用社会であることは間違いない。

歴史的にみると、当然のことながら、圧倒的にゲルマン語との接触があったことは間違いない。しかし、どの時代の影響か、また個別の特徴について言語史を再構成することは、かなり難しいと思う。Gamillscheg は、もともとはレト・ロマンスという空間、ないしはエリアがあって、様々な民族が間に入ってきたがために3つに分かれたと仮説的に説明していて、これに従えば「レト・ロマンス」という概念をとりたいのだが、イタリアの学者たちの主張は大きく違うことも付言しておきたい。

山本真司：イタリアでの研究を紹介すると、一連のシンタクスに関する新しい情報を踏まえた上でこの議論がなされてもいいのではないかという気がする。先ほど私の発表でも申したが、言語接触の問題についての議論は、状況証拠から一目瞭然で、だからそうなのだ、ということになりがちである。しかし、そこに構造の問題についての考察が加わると説得力が増す。また、同時に、難しいところだが、裏側にそういう構造上の理由があるのなら接触と考えなくてもいいのではないかという議論が出てきた。たとえば私は、パドヴァ学派の先生方とインスブルック学派の先生方の議論がいつまでたっても平行線であるのを体験している。短い時間では言えないが、ラディンというふうと一緒にできない複数の言語のグループだということは留めておいてほしい。ボルツァーノ県の少なくとも2つ、あるいは数え方によっては3つの変種のラディン、それからトレント県のラディン、それと、ベルノ県のラディンはシンタクスに関して全く違った現象を示している。いわゆるドイツ語的な影響が認められる語順について話すときにはおそらく専らボルツァーノ県の話になると思うが、それがどこまで拡張可能かは定かではない。地域によっては、ロマンシュ語の基層があり、その上にドイツ語化が行われたという問題もあるため、これは別個に取り扱わないといけない。ドイツ語化が出来上がってしまったのは19世紀だったかと思う。

菅田：田中さんの不定詞の発表については、現地で調査をされて、パーセンテージまで示されてとても興味深く伺った。

そこで、さきほど古浦さんからもお話があったように、イタリア語の影響が若干加わっているのではないかなどわからないことはある。だが、私の個人的な印象では、最初にこの問題に取り組んだ Wartburg はギリシャ語で語末の *n* が消滅するという音声変化の結果、不定詞とその実際の活用語尾が同じ形になったところから消えていったとしている。ただアテネの今の現代ギリシャ語では、知覚動詞とか心理動詞の場合にまでこうなっているかについてはよくわからないが、不定詞は消滅したと思う。

面白いことに Rohlfs が約20の文章をイタリア語で比較対照している。アルバニア語、ルーマニア語、それから南イタリアのギリシャ語は、今日触れられたギリシャ寄りのと反対側のカラブリアのほうにもう一カ所ある。この2つがほぼ同じような傾向を示していると、1968年に泉井先生が『ヨーロッパの言語』で書いている。そして英語の *can* に当たる動詞 *sapere* 「できる」のあとで

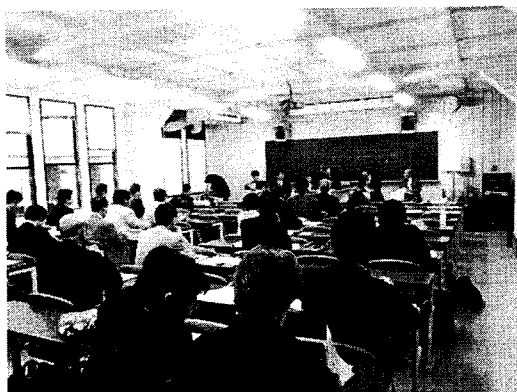
は不定詞が南イタリアのほうでは残っていて、アテネでは消えている。私は現代ギリシャ語はわからないが、ギリシャ語では一応消えて、それが消えるに至るまでのいろいろな発展の段階が、ルーマニアや南イタリアのギリシャ語、またアルバニア本国でのアルバニア語と南イタリアのアルバニア部落のアルバニア語に段階的に残っているというのが大きな流れではないかという印象を持っている。興味あることは、「できる」という動詞に、不定詞を使っているが、そうでない「欲する」という動詞には、従属節が続いていることである。(直野に対して) ルーマニア語では「欲する」のときは不定法を使えますか。

直野:「欲する」のときはほとんど使えない。接続法である。

菅田: 接続法。すると南イタリア語の傾向と一致する。だからむしろイタリア語の影響がない。段階的に空間の上に反映させる言語地理学的になってくるかもしれない。

田中: 菅田先生や古浦先生が先ほど伝えられなかった部分を補足させて頂きたい。イタリア語からかはわからないが、Rohlf's が出したものと、今例を出したものの年代差について考えなければいけない。可能性の1つとして考えられなくはないと思う。また、どういう動詞が明示節、非明示節をとるかは、地域によってもサレント方言の中であっても、あるほうでは非明示節しかとらないところもあり、非明示節を優先すると地域のなかでも南のほうへ行くと明示節しかとらないっていう人がいたり、かなり可変的で言語地理学的な要素も重要だと思う。

寺尾: 先ほどの語頭の流音の硬口蓋化の話で付け加えたいが、この辞書を編纂した Moisés Pires さんは、本当は農民で一生を過ごしてしまうはずが、とても利発だったため、聖職者として担ぎ上げられたというインテリ層で、(ミランダ語の最初の本格的記述書であった) Leite de Vasconcelos の *Philologia Mirandesa* (綴りママ) を読んでいる可能性が高く、「Vasconcelos による(新しい語彙はすべて L- で発音されているという) 記述に引っ張られる形で、新しい言葉を全部 L- で書いたのではないか?」という疑問が浮かぶかもしれない。しかし、非識字者で、Vasconcelos の本を読んだことが無いような人に尋ねてみると、たとえば「イカ」という意味の Lula について、ミランダ語だから *Lhula になるかというのと、あれは海のものだから Lula だという答えが返ってくる。山深いミランダで、海産物をはじめとした生鮮食料品が地域の中に入ってきたのが近年になってからということを考え合わせると、やはり口蓋化した流音の Lh- は新しい語彙には使わない傾向が判じられる。それを音韻現象と捉えるか音声現象と捉えるかというのは切り口の問題だと思うのが、今後



検討してみたい。

荻原寛：クレオール立場から質問させてもらいたい。私のクレオールの研究というのは、スペイン語とタガログ語、その中でもチャバカノ Chavacano と言われるもので、全く言語構造が違うもの同士の接触によるものだが、そのときに個人的に導いた結論は、2つの言語が接触して、クレオールになる段階ではそれぞれが重たい部分を捨ててしまい、そうしなければ利用出来ないのではないかというものである。スペイン語の場合は動詞の複雑な時制や法である。タガログ語の場合には、接辞や、動詞の形がそれによってどんどん変わってくる、つまりフォーカスの問題などだが、それらをお互いが捨てることによって違う言語になった。一見、スペイン語風だがよく見たら全然違うということがあり、それぞれの言語が違う言語と接触した場合に重たいところを捨てようということがどの現象でもみられるのか。それとも、同じヨーロッパの言語同士ではそこまでいかないのかということをお聞きしたい。

直野：バルカンの諸言語の場合、上位言語、下位言語の区別が無い。要するに、圧倒的に文化的に高い言語とか数量的、人口的に大きい国の言語が小さい国の言語と接触したというよりも、むしろ、ほとんど同じくらいの人口の4つか5つの、ギリシャ、アルバニア、ブルガリア、ルーマニアのような国が同じ地域にあって接触しているというのが実情である。さらにルーマニア人の場合だと、移動性のグループで羊飼いであるため、ルーマニアのほうから冬になるとギリシャまでおりてくる。そしてブルガリア人は野菜作りがうまいため、ルーマニアに出張してルーマニアで畑を作る。さらにルーマニアの一部のア・ルーマニア人は運搬業に従事して、バルカンをあっちこちいく。ギリシャ人はルーマニアの地主たちのアドミニストレーターとなり、ギリシャ人やトルコ人のすぐそばにくっついてブルガリアやルーマニアにやって来る。従って様々な同規模の人が行き来しているわけで、コミュニケーションの必要性があり、それぞれの言語はあくまで語彙、これに関してもかなり似てきてはいるが、しかし語彙は結構残っていて、シンタクスの構造が非常に近づいている。完全に必ずしも一致するわけではないが、先ほど言った接続法の用法や、後置詞、不定冠詞の問題は全部アルバニア、ルーマニア、ブルガリアと共通している。また、代名詞の二重使用という現象も非常に似ている。そのため、ルーマニア語を読み、ブルガリア語を読み、アルバニア語を読むと、同じ骨組みがあって、それに語彙を埋めていけばそれぞれの文章が出来てくるといことがある。だから翻訳するのがある意味では簡単で、その場合、「捨てている」というよりも、近づいているというかコンバージェンスである。コンバージェンスの現象が少なくともバルカンの言語圏では起きているような感じだ。だからクレオールというのがそこでは生まれないのではないかと思う。

菅田：日本語のクレオールが台湾にもあるという報告もある。

§ 3 まとめ

通常、言語学では、ある程度の規模と広がりをもった「二言語あるいは多言語使用」を前提に生じる、言語間の相互影響状況を「言語接触」と呼んでいるようである。個別の言語には、当然の事ながら、常に話し手が存在するので、言語の接触は、一般的には、話し手という個人または集団の物理的接触を通じて現実の世界では実現されることになる。もちろん、言語を、現実の話し手から切り離して抽象的な体系として扱うことも可能であるから、たとえば、いわゆる「外国語学習」というようなものは、学習者の頭のなかで、話し手と話し手の接触を伴わない言語の接触が行なわれているとも考えられる。ただし、この場合は、学習対象の言語が中間言語として「ちがった形で」実現することはあっても、学習者の母語にしても学習対象の言語にしても異なるコードが保持されて、基本的な部分に変化することは普通でない。歴史言語学の重要なテーマのひとつである「語の借用」も、人間の移動や接触を伴わない言語間の接触であることが多く、借用によって借用語を受け入れた側の言語に大きな変化が起こることはまれでまれである。寺尾氏のポルトガル北東部の少数言語であるミランダ語についての発表では、借用語にみられる音韻の分析に関する問題がとりあげられた。

しかし、一定規模の集団による「二言語あるいは多言語使用」を前提に生じた言語接触の場合、文法をはじめとして言語構造の根幹に関わる変化が起こることがある。これは、話し手において「コード・スイッチング」や「コード間の干渉」が起こるためである。伝統的には、言語接触のタイプは、それに関与する言語集団の社会的・文化的な地位や力関係などによって分類される。上層とか基層などという用語は、特に一方の言語が他方の言語にとって替わられたときなど、このような力関係に応じて呼ばれる名称である。今大会では、田中氏の発表での、サレント方言におけるギリシア語基層とか、富盛氏のスイス・ロマンシュ語におけるゲルマン上層の影響といったものがこれに該当する。他方、接触した言語の間に社会的威信に関する上下関係がそれほどなく、対等ないし並列的な関係が保たれている場合は傍層と呼ばれる。バルカン半島における言語状況がこれに該当するが、これに近い状況にあっても、接触に関与している言語に対する社会的意義付けが、隣接する地域ごとに多少異なる場合もあり、山本氏の発表が、このような例として、イタリア北東部における複雑な言語状況をみごとに活写している。

言語接触が長期間にわたると、地域の言語事情が大きく変化することがある。一方の言語が他方の言語に吸収され、結果的に、言語の交替が起こる場合がある。基層または上層などと呼ばれる、消えてしまったほうの言語の痕跡を、残っているほうの言語の構造の中に見て取ることが出来る場合があるが、多くの場合、状況証拠的なものにとどまり、厳密な論証が難しいのが普通である。田中氏や富盛氏の発表、あるいは総合討議の中での質疑応答がこれに関係している。また、それぞれの言語集団が自らの言語を保持しながら、相互に順応するというタイプの変化もあり、いわゆる収束現象が観察される場合もある。言語連合とか言語圏などと呼ばれるものがそれで、直野氏の発表は、バルカン言

語連合の場合の社会的背景などについても触れられていて興味深い。言語接触のもうひとつの結果で、ピジンやクレオールなどと呼ばれる一種の「混成言語」の発生については、今回は扱われなかった。寺尾氏のポルトガル北東部の少数言語であるミランダ語についての発表は、借用語の音韻に関する問題が中心であった。

